

意見陳述書

松山地方裁判所民事第 2 部御中

原告 大池 ひとみ
(西予市宇和町)

私は 1956 年愛媛県西予市宇和町卯之町で生まれ、高校を卒業するまでその地で過ごしました。短大を卒業した 1977 年、子供の頃からあこがれていた日本航空に入社し、地上研修と訓練所を経て、翌年の春から 32 年間、客室乗務員として世界の空を飛び回っていました。客室乗務員の仕事は長時間労働の上、低酸素、揺れ、振動、ほぼ 0%に近い湿度、傾斜のある通路、おまけに時差もあり、身体的にかなり過酷です。また常に人から見られていて、一挙手一投足にクレームをつけられる精神的にも非常にタフな職場でした。ですが、乗務員同士が連帯感をもってチームワークで仕事をやりとげ、想定外の事態にもうろたえることなく臨機応変に対応できる経験を重ねました。

また、通常であれば地上ではお会いする機会のない、各界のお客様のたたくまいやお話し、世界各地の人々や風物との出会いを通じて、多くのことを教えられました。また、職場の尊敬する先輩方からは、空の安全を守る職業人として、社内での昇給や昇格などの激しい労働組合差別を受けながらも、優先しなければならない発言や行動があることを学び、私もそのような人たちの一員であることに誇りをもっていました。良いことも悪いこともすべての経験は私を人間として成長させてくれました。が、定年まであと 6 年 6 ヶ月という 2010 年に、経営破綻した日本航空は整理解雇という名目でベテランのパイロットと客室乗務員 165 名を職場から排除し、その中に私も含まれました。

その数年前から高齢となった両親の見守りと介護のため、乗務の合間を縫って帰省していました。若い頃は、再び田舎で生活するなど思いもしませんでした。が、頻りに故郷に帰るうち、私が知っている世界の各地のどこよりも美しい、四季おりおりの姿を見せてくれる故郷の良さに目覚めるようになりました。父と母をそれぞれ見送ったあと、6 年前に横浜のマンションを引き払い、故郷に戻る決心をしました。現在は、実家から車で 15 分ほどの水のきれいな集落に住んでいます。

1986 年 4 月 26 日、チェルノブイリ原発事故が起こりました。当時、日本航空はモスクワとヨーロッパ 8 都市に就航しており、私はその事故の 2 週間前にはコペンハーゲン、ハンブルグ、その 2 週間後にはロンドン、アムステルダム、マドリッド便に乗務していました。私たちは、放射能がヨーロッパ各地に飛散することを懸念して、当分はパン、パスタもサラダも食べるのが怖くなるね、と話してはいましたが、

事の重大さをそれほど深く理解していなかったような気がします。高度 1 万メートルを超える成層圏を職場としている私たちは宇宙線を浴びながら仕事をしているので、今さら放射能と言ったってね、という安易な気持ちがあったのは事実です。

それから 20 年ほど経った時、ウクライナのキエフ、ベラルーシのミンスクを訪れる機会がありました。ベラルーシの人々は一見、普通に暮らしているように見えたが、放射能の影響は子どもたちに出ていることを知りました。内部被ばくをした子供たちの甲状腺がんが 5 年後にピークとなり、それ以降、ベラルーシ政府は、子供たちが毎年無料で検査を受けられること、1 年のうち数ヶ月はサナトリウムで保養できること、それらを一生継続権利として認めることにしたそうです。それだけ心と身体に取り返しのつかない大きなダメージを受けたということになります。

キエフにはチェルノブイリ博物館が造られていて、事故当時の状況や被害の規模に関する資料が展示されていました。毒ガスマスクの装備姿の人形や、放射能の雨に打たれて枯れてしまった木々や、事故後の処理に携わり、命を落とした方々の顔写真が一面に貼られているコーナーに衝撃を受けました。それでも危機感は募りつつも、日本ではこのような原発事故はまさか起こらないだろう、起こらないといいが、という程度で、原発はすぐにも止めなければ、という行動にまでは思い至りませんでした。

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災のその日、私は職場を不当に奪われた仲間たちと共に東京地方裁判所の大法廷にいました。閉廷後、交通網が混乱する中、自宅のある横浜に戻れたのは 11 時間後の深夜 2 時でした。そして、家の中はめちゃくちゃになっていました。福島から 300km 離れた横浜でこのありさまですから、被災された方々は、どれほどの被害を受けられたのか、どれほど怖い思いをされたのか、想像もできません。その後の福島第 1 原子力発電所で起きた事故の進展、放射能汚染の拡がり、は原子力発電所に対する私の認識を根底から覆しました。

現在、日本はいつどこで地震が起こってもおかしくない状態です。南海トラフで起こる地震の可能性は 30 年以内に 70%~80% の確率で、伊方町も西予市も予想最大震度が 7 ということです。伊方原子力発電所から私の実家は直線距離にして 23.8km、現在住んでいる場所は 30.3km。わずか 7km ほどの差で、事故のときの避難場所が変わります。実家のある卯之町は砥部町へ、私のいる地区は市内東方の城川町と指示されています。でも、たぶん、西予市民で自分の避難先がどこかを知っている人はほとんどいないと思います。伊方原発は近くにあるけれど、まさか事故なんて起こる訳がない、起こったとしても、ここまでは被害は及ばないだろう、という根拠のない希望的観測で生きていくしかないわけです。そもそも、地震が起こったら、砥部町や城川町へ避難できるとは思えません。

一昨年の西日本豪雨で私は床下浸水の被害に遭い、道路は土砂崩れで陸の孤島となりました。震度 7 クラスの地震が来たら、地形がそのまま維持されることは不可能でしょう。近未来に確実に想定さ

れている地震により伊方原子力発電所で事故が起こったら、私の住む地区の住民は、飛んでくる放射能から逃げることはできません。西日本豪雨で緊急放流をし、町が水に浸かってしまった野村町のダムの水は近隣の水源です。飲料用のその水が放射能で汚染されたら、それだけで 10 万人が生活を奪われることになってしまうのです。

私は長年、空の安全を守ることを使命とする仕事をしてきました。安全は何より優先する絶対の原則であり「迷ったら安全をとれ」と常に教えられてきました。それでも日本航空は、私が入社して 1 か月もたたないうちにクアラルンプールで墜落事故を起こし、1982 年には羽田沖墜落事故、上海空港オーバーラン事故、1985 年には史上最悪の 123 便御巣鷹山事故と、多くの人命を失う事故を防ぐことができませんでした。私は、乗務した 32 年間に死亡事故こそ遭いませんでしたが、多くのイレギュラーに遭遇しました。天候の悪化や機材の故障で目的地以外の空港に着陸することは 30 回以上、これはギネス級でしょう。また、バードストライク、エンジン停止、急病人発生など突発的な緊急事態を数え切れないほど経験しました。

航空機の運航は機械と人間がつくる精密で巨大なシステムです。航空機事故の原因を分類すると、パイロットの誤操作、見落とし、些細な注意義務違反に起因するものが約半分を占めていると言われています。機械技術は日進月歩、事故防止のためにバックアップは二重三重に設計されていますが、これは正しく操作されて初めて二重三重の守りになり、単純で些細な人為的ミスはこれらのバックアップシステムを一挙に飛び越えて重大事故に直結するのです。理屈や設計の上では安全が何重にも確保されており、事故は起こらないとされていても、機械は故障し、運用するのは神ならぬ人間であり、相手にするのは人の予測をはるかに超えた自然です。精密で巨大なシステムに「絶対安全」は 100% あり得ず、現実には不可抗力、人為ミスを含め、いろいろな要因で事故は避けられないというのが私の職業上の経験から確信をもって言える過酷な真実だと思います。

それでも私たちの社会は航空機を利用せざるを得ません。一定の確率で避けられない航空機事故に目をつぶっても、航空機の利用によって得られる利便性を捨てられないからです。だからこそ、絶対安全により近づくため日々たゆまぬ努力をしていかなければなりません。しかし、原子力発電所の事故の被害は、航空機事故と比べ物にならないほど大きなものです。人の命はもちろん、土地や家や家族や職場、町全体、もしかしたら、日本という国さえなくなってしまうほどの甚大な被害が、それも子々孫々にわたって続くのです。それがわかっていながら、なぜ四国電力は原子力の利用をまだ続けようとするのでしょうか。なぜ安全だと言い切れるのでしょうか。

佐田岬半島にはあまり平地がなく、山の斜面に転々と家が建っています。各家を回ってポスティングをしたり、アンケート調査を手伝ったことがあります。「うちは四電に親戚がおるんで。」と言葉を濁す人、「どうせわたしら、もうすぐ死ぬけん。伊方原発がどうなろうと関係ないわい。」と諦めてしまっているお年寄りたち、「原発がなかったら仕事がなくなるし。」と本音を漏らす若者、いろんな人に出会

いました。それぞれの事情はあるにしても、そのような人たちが原発を受け入れようとする選択は理性や道徳から引き離されたものだと思うのです。

海外では、日本人は真面目で親切でルールを守り、町は清潔で美しい、と評価されています。私はそれを誇らしく思ってきました。その反面、政治や経済やむずかしい問題は人任せで、自分の意見を主張したり、自分の考えで行動することは少ないのが実情です。黙っておとなしくしていれば世の中を上手に渡っていけると思われているような気がします。わが国の尊敬すべき女性の社会運動家はこう言っています。「沈黙は犯罪、傍観は共犯、無知は罪」と。私もその言葉に導かれて世の中のさまざまな理不尽な問題を考えるようになりました。

伊方原子力発電所では今年の1月12日、3号機で核燃料を取り出す作業の準備中、制御棒1本を誤って引き上げるミスがあり、1月25日には外部からの電力供給が止まり、電源を一時喪失するトラブルがありました。先に述べたように、二重三重のバックアップシステムがあっても、些細な人為的ミスで重大な事故に発展する可能性は大いにあり得ることです。さらに、そこに南海トラフや中央構造線の巨大地震が重なってしまえば、福島どころの被害ではおさまらないのは世界中が知っていることです。海外の23の国と地域は、9年たった今でも日本からの食糧輸入に制限を設けています。放射能の影響はまだあると思われるのです。

事故が起こってからでは遅すぎます。空の安全を守るため、乗務員の良心に従い、さまざまな圧力と闘ってきた私たちと同じく、裁判官にも誇るべき職業上の良心がおありと思います。その良心に基づく判決を心からお願い致します。